

指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書 第59集

平成28年度市内遺跡確認調査報告書

宮 之 前 遺 跡  
南 摺 ヶ 浜 遺 跡  
松 尾 城 跡 V

平 成 2 9 年 3 月  
指 宿 市 教 育 委 員 会

平成 28 年度市内遺跡確認調査報告書 第 59 集

頁・行	誤	正
P11	H4・5 指宿市確認調査	H4・5 年指宿市確認調査
P12・9 行目	平成 28 年 12 月 20 日	平成 28 年 12 月 21 日
P17・9 行目	曲輪 7 とほぼ一致する	曲輪 6 とほぼ一致する
報告書抄録 富之前遺跡発掘調査	H28.8.18～20	H28.7.15～7.21
報告書抄録 南園・河津跡発掘調査	H28.12.19	H28.12.21

## 例 言

1. 本書は平成28年7月15日から7月21日(うち4日間調査)まで実施した鹿児島県指宿市西方宮之前に所在する宮之前遺跡の確認調査、平成28年12月21日に実施した鹿児島県指宿市湯の浜に所在する南摺ヶ浜遺跡の確認調査、平成29年1月16日～1月17日まで実施した松尾城跡の測量調査報告書である。起因事業は鹿児島県南薩地域振興局による平成28年度農村地域防災事業(宮之前遺跡)、集合住宅建設に伴う確認調査(南摺ヶ浜遺跡)である。
2. 発掘調査は指宿市教育委員会で実施した。確認調査は松崎大嗣が担当し、松尾城跡の測量は鎌田洋昭が担当した。調査組織は以下のとおりである。

発掘調査主体	指宿市教育委員会				
発掘調査責任者	指宿市教育委員会	教 育 長	西 森 廣 幸		
発掘調査担当組織員	指宿市教育委員会	教 育 部 長	長 山 君 代		
		社会教育課長	中 摩 浩 太 郎		
		文化担当主幹	鎌 田 洋 昭		
		管理係主幹兼係長	迫 田 優 子		
		社会教育係主幹兼係長	鴨 崎 一 郎		
		文 化 係 長	上 園 浩 司		
		文 化 係 主 事	廣 田 さ お り		
		文 化 係 技 師	西 牟 田 瑛 子		
		文 化 係 技 師	松 崎 大 嗣		

発掘調査作業員	飯塚 勝正, 下拂 喜代志, 高橋 史
整理作業員	清 秀子, 竹下 珠代, 鎌田 真由美, 境 由希

3. 本書の編集、図面作成、写真撮影は松崎大嗣が行った。
4. 「第3章 松尾城跡」に掲載されている図面の測量・製図は株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
5. 調査、および報告書作成に要した経費のうち、50%は国、4.3%は県からの補助を得た。
6. 本報告書におけるレベル高は、宮之前遺跡は海拔を表し、南摺ヶ浜遺跡は表土からの深さを表す。方位は真北方向を示す。
7. 図中に用いられている座標値は、国土座標系第Ⅱ系に準ずる。
8. 出土遺物については観察表を作成した。寸法の表記のなかで復元によるサイズは()をつけた。
9. 遺構は遺構の略号を示す以下の記号と、一連の番号の組み合わせにより表記する。  
SD(溝)、SK(土坑)
10. 層・遺物の色調は『新版標準土色帖』(農林水産技術会議事務局監修)を使用した。
11. 本文中の遺物番号は、挿図、図版、遺物観察表と一致している。
12. 発掘調査で得たすべての成果については、指宿市考古博物館時遊館COCCOはしむれで保管し、活用する。なお、宮之前遺跡の遺物注記の略号は「MNM」、南摺ヶ浜遺跡の遺物注記の略号は「MS」、迫田遺跡の遺物注記の略号は「SKD」である。

# 目次

## 第1章 宮之前遺跡

第1節 遺跡の位置と環境、調査履歴	1
第2節 調査に至る経緯	2
第3節 調査概要	
第1項 1TR	4
第2項 2TR	4
第3項 3TR	4
第4項 4TR	5
第5項 5TR	8
第6項 周辺表採遺物	8
第4節 調査のまとめ	9

## 第2章 南摺ヶ浜遺跡

第1節 遺跡の位置と環境、調査履歴	10
第2節 調査に至る経緯	12
第3節 調査結果	12

## 第3章 松尾城跡

第1節 松尾城跡の踏査	14
-------------	----

## 第4章 その他市内遺跡

第1節 迫田遺跡	19
----------	----

## 挿図目次

第1図 宮之前遺跡の位置	1
第2図 宮之前遺跡トレンチ配置図	2
第3図 1TR 平面図・断面図	2
第4図 2TR 平面図・断面図	3
第5図 2TR 出土遺物	4
第6図 3TR 平面図・断面図	5
第7図 3TR 出土遺物	5
第8図 4TR 平面図・断面図	6
第9図 4TR 出土遺物	6
第10図 5TR 平面図・断面図	7
第11図 5TR 出土遺物	7
第12図 周辺表採遺物	8
第13図 南摺ヶ浜遺跡の位置	10
第14図 南摺ヶ浜遺跡トレンチ配置図	11
第15図 南摺ヶ浜遺跡トレンチ断面図	12
第16図 松尾城跡縄張り図	14
第17図 曲輪1・2・6・7測量図	15
第18図 曲輪6・7測量図および断面図	16

第19図 曲輪6・7近景写真(南から)	17
第20図 確認調査・工事立会地点	18
第21図 迫田遺跡の位置	19
第22図 工事立会地点の位置	20
第23図 工事立会地点平面図	20
第24図 SK1 出土遺物(1)	21
第25図 SK1 出土遺物(2)	22

## 表目次

第1表 宮之前遺跡出土土器観察表	9
第2表 確認調査・工事立会一覧	18
第3表 迫田遺跡出土土器観察表	22

## 図版目次

図版1 宮之前遺跡1TR～4TR	23
図版2 宮之前遺跡4・5TR, 南摺ヶ浜遺跡	24
図版3 出土遺物写真(1)	25
図版4 出土遺物写真(2)	26

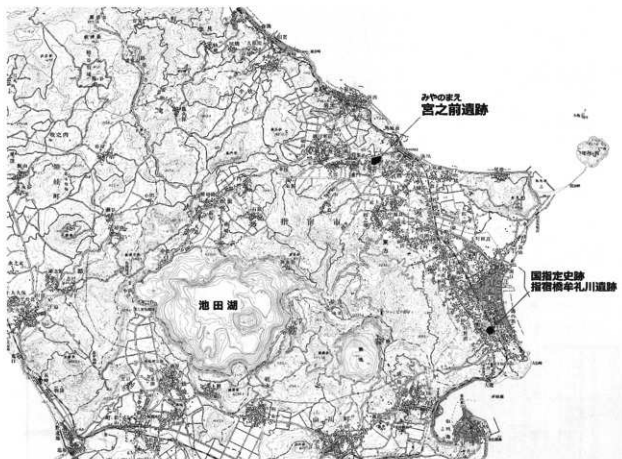
# 第1章 宮之前遺跡

## 第1節 遺跡の位置と環境，調査履歴

宮之前遺跡は、指宿市北部に位置する古墳時代後期から平安時代にかけての複合遺跡である。遺跡は、宮ヶ浜を望む標高20～30mの台地上に位置している。台地はほぼ平坦な地形で、台地末端部分では10～20mの急崖となっており、遺跡の立地する宮之前、赤崎の両集落付近では、南へ向かってゆるやかに傾斜している。台地の基盤は、約5,700年前に池田湖が噴火した際の池田火砕流によって覆われ、シラス台地を形成している。台地の南縁には湊川がシラス台地を切る形で東に向かって流れている。

湊川を挟んで南側の台地上には弥生時代後期の建物跡が検出された横瀬遺跡が所在し、建物内からは高付式・中津野式に位置づけられる土器や小型仿製鏡が出土した。また、台地を東側へ下った宮ヶ浜地区では近世において阿多溶結凝灰岩を用いた国登録有形文化財「宮ヶ浜港防波堤（捍海隄）」や中世に指宿を治めた指宿氏の居城である松尾城跡などがある。

宮之前遺跡が位置する宮之前台地では、昭和55年から56年にかけて泉宮畑地帯総合土地改良事業に伴う確認調査、発掘調査が実施されている。この調査では、第1～第18のトレンチを設定して調査が行われており、古墳時代後期～古代に位置づけられる8基の竪穴住居跡や土器溜まりなどが確認されている。また、一部地点においては西暦874年3月25日に噴火した開聞岳の噴出物である紫コラ直上の層からも土器が確認されている。そのため、噴火後人々の居住が中世までみられない国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡や敷額遺跡とは異なり、噴火の影響は軽微で、人々の生活が継続していた可能性も考えられる。

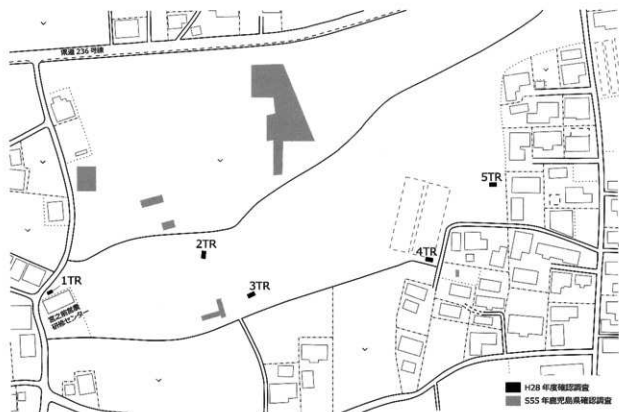


第1図 宮之前遺跡の位置 (S=1/50,000)

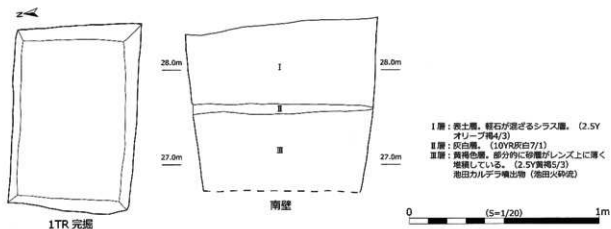
## 第2節 調査に至る経緯

宮之前遺跡範囲内で鹿児島県南薩地域振興局によって「農村地域防災減災事業（農村防災施設整備）指宿地区」計画が立案された。指宿地域の中でも宮之前地区では赤崎集落と宮之前営農研修センター間の緊急避難路を建設する計画であり、当避難路は宮之前遺跡の遺跡範囲の中央を横断する形で建設される予定であった。

そこで、県南薩地域振興局に対して文化財保護法第94条第1項による届出書提出を依頼し、避難路建設予定地内において確認調査を実施した。調査期間は平成28年7月15日～7月21日である。



第2図 宮之前遺跡トレンチ配置図

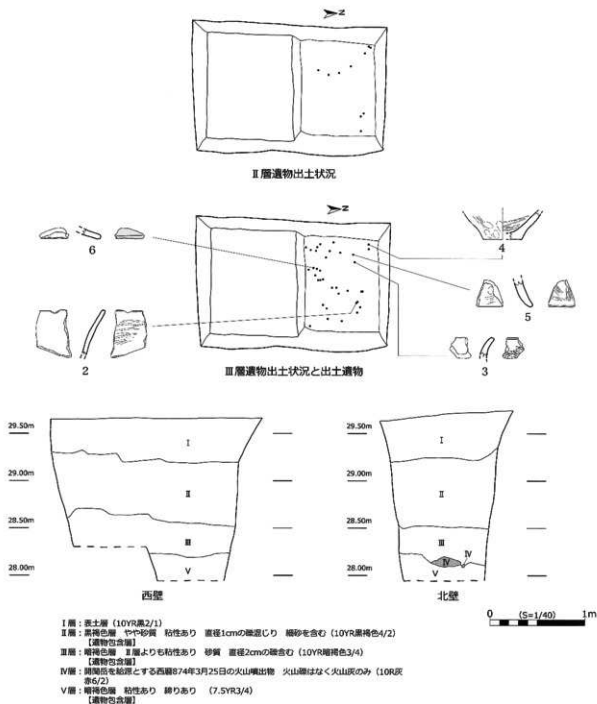


第3図 1TR平面図・断面図

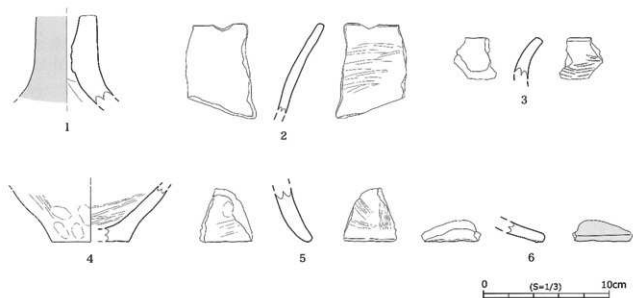
### 第3節 調査概要

試掘トレンチは避舞路として拡張される予定である現況の農道東西353m間に7箇所設ける予定であったが、耕地内作物の関係で最終的に5箇所を設定した(第2図)。各トレンチにおいて、重機・人力による掘削を行い、遺構・遺物包含層の有無を確認した。

以下、各トレンチの概要について説明する。



第4図 2TR平面図・断面図



第5図 2TR 出土遺物

#### 第1項 1TR (第3図, 図版1)

1TRは宮之前宮典研修センターの北側に設定した。重機等による掘削を行うと表土近くから池田カルデラの火砕流堆積物(Ⅲ層:池田シラス)がみられたため、本地点では遺物包含層を確認することができなかった。周囲の耕作地面においてもシラスが露出しているため、本地点の周辺においては古墳時代の遺物包含層は削平されているものと考えられる。

#### 第2項 2TR (第4図, 図版1)

2TRは現在の農道脇に設定した。周辺では成川式土器が採集できたため、遺物包含層が削平されていないことが予想された。

掘削を始めたところ、Ⅱ～Ⅲ層において遺物が散発的に確認できた。Ⅲ層下位では西暦874年3月25に噴出した開聞岳の噴出物(通称:紫コラ)を確認することができた。この紫コラ(Ⅳ層)は火山灰ブロックで、火山礫や土石流堆積物は検出されていない。Ⅴ層においても成川式土器が少量確認できた。

#### 【2TR出土遺物(第5図, 図版3)】

2TRでは計113点の遺物が出土した。Ⅱ層から35点、Ⅲ層から78点出土している。その中で、実測可能な6点の遺物を掲載した。

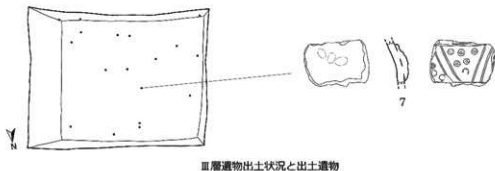
1は高杯の脚部である。外面は摩滅しているが、丹塗の痕跡を確認できた。2は甕の口縁部である。口唇部は丸みをおびた断面コの字状で、ゆるやかに外反するものである。3は土師器甕の口縁部である。外面にはタタキの痕跡がみられる。質感はやや軟質で明褐色を呈する。4は壺の底部である。平底の底部で、復元径6.0cmを測る。立ち上がり部分ではユビオサエの痕がみられ、内面はミガキ調整で仕上げられている。5は甕の脚端部である。口唇部は丸みをおび、ハの字に開く形態である。外面は摩滅しているが、わずかにハケ目の痕跡がみられる。6は高杯の脚端部である。端部は断面コの字状で、内面をわずかに肥厚させる。外面には丹塗が施される。

#### 第3項 3TR (第6図, 図版1)

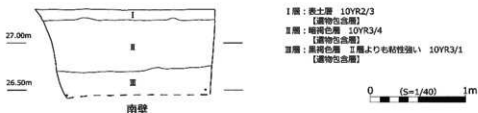
3TRは農道に面した耕作地内に設定した。周辺では土器片が多く散布していた。2TRとの比高差はおおよそ2mで、2TRで確認した遺物包含層が現耕作面に露出している可能性が想定された。

掘削を行うと、表土層から遺物の出土が認められた。2TRでみられた紫コラは確認できなかった。遺物は散発

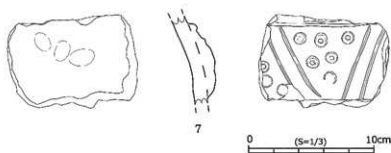




Ⅲ層遺物出土状況と出土遺物



第6図 3TR 平面図・断面図



第7図 3TR 出土遺物

的に出土する状況で、Ⅲ層からの出土が最も多かった。

#### [3TR 出土遺物 (第7図, 図版3)]

遺物は計34点出土した。Ⅱ層から16点、Ⅲ層から18点出土した。いずれも細片で、実測可能な土器は1点のみであった。

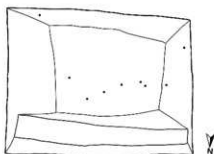
7は大型壺の幅広突帯部分である。突帯には二条の沈線が鋸歯状に刻まれ、沈線によって区画された中に竹管文が充填されるタイプの装飾が施される。突帯の幅は約6.0cmで、およそ1.0cmの厚みがある。竹管文の径は平均0.9cmであった。内面は摩滅しているため、調整は不明である。直径0.5cmを超える砂礫が多く混入している。

#### 第4項 4TR (第8図, 図版1, 2)

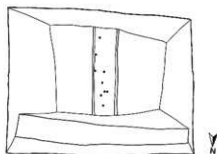
4TRは農道がクランク状に折れ曲がる地点横の耕作地内に設定した。耕作地は農道とは50cmほど比高差をもちながら一段高まっている。4TR周辺でも土器片が採集できるため、本地点においても遺物包含層が存在することが想定された。

#### [4TR 遺構 (第8図, 図版1)]

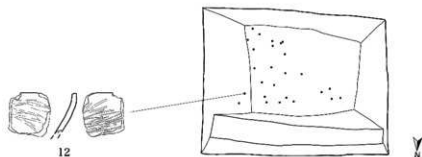
Ⅱ層上面において、幅50cm、深さ40cmほどの小さな溝(SD1)を検出した。南北に直線的にのびる形状で、遺構埋土からは成川式土器の小片も9点出土している。実測可能な遺物は無かったが、Ⅱ・Ⅲ層からも遺物が出



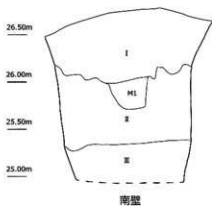
II層遺物出土状況



SD1層遺物出土状況

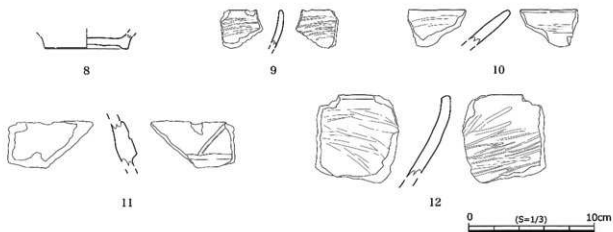


III層遺物出土状況

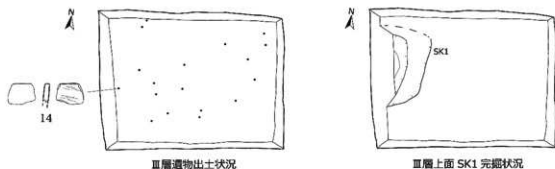


- I層：表土層 (2.5Y6/4)
- II層：黄褐色層 やや締まりが強い、直径1cm程度の破片が散じる。(2.5Y黄褐色5/3) 【遺物包含層】
- III層：黒褐色層 直径1mmほどの破片が多量に散じる 水分を含み粘りが強い (2.5Y黒褐色1/3) 【遺物包含層】
- M1：黄褐色土層 III層を覆ひ込んだSD1の埋土層 やや締まりが強い 埋土中からは成川式土器の破片が出土

第8図 4TR 平面図・断面図

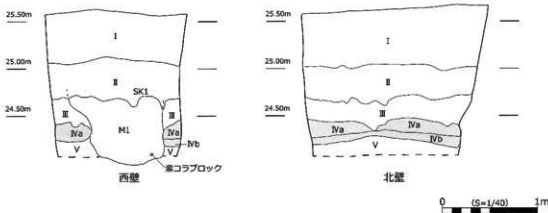


第9図 4TR 出土遺物



Ⅲ層遺物出土状況

Ⅲ層上面 SK1 完形状況



- I層：黄土層 2.5Yに近い黄6/3  
 II層：黄褐色層 締まり無し 粘性無し 直径1~2cmの磁道じり 2.5Y黄褐5/3  
 【遺物包含層】  
 III層：黒褐色層 締まり無し 粘性やや有り 直径0.5cmの球が少量混じる 明褐色のシルトが少し混じる 2.5Y黄褐3/1 【遺物包含層】  
 IVa層：灰緑色を総層とする西暦74年3月25日の火山噴出物の2次堆積層  
 IVb層：黄褐色を総層とする西暦74年3月25日の火山噴出物（火山灰層）  
 V層：黄褐色層 締まり有り 粘性有り 遺物包含層 10YR黄褐5/6  
 M1層：黒褐色層 草層よりやや強い 草層~IV層を縦り込んだSK1の埋土 埋土からは扇川式土器の破片が2点出土 10YR黄褐3/1

第10図 5TR 平面図・断面図

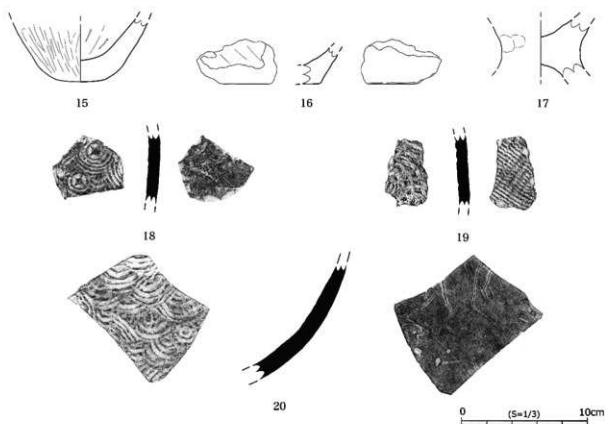


第11図 5TR 出土遺物

土していることを考慮すると古墳時代以降に掘り込まれた溝で、溝内出土遺物は溝掘削時に混入した可能性がある。  
 【4TR 出土遺物（第9図、図版3）】

出土遺物は計166点である。I層で25点、II層で24点、III層で117点出土している。そのうち、実測可能な土器5点を掲載した。

8は高台付磁器の底部である。底径は復元で6.6cm、高台の高さは0.3cmを測る。高台部には、砂が付着している。9は埴の口縁部である。内外面とも幅1mmほどの丁寧なミガキが施される。10は鉢で口縁部が直線的に開く形



第12図 周辺表探遺物

態を呈する。口唇部は丸みをおび、内外面にナデ調整がみられる。11は壺の肩部に施された突帯である。突帯の幅は2.9cmと中幅で、厚みはおよそ0.6cmである。突帯表面には一条の沈線がみられる。12は内湾する甕もしくは鉢の口縁部である。外面は幅2～3mmほどのミガキが施され、光沢をもつ。内面には粗いミガキ状の工具ナデがみられ、光沢はない。

#### 第5項 5TR (第10図, 図版2)

5TRは当初既設の道路面近くに設定する予定だったが、作付けされた作物の関係で掘削が難しかったことから、道路から北寄りの耕作地脇の地点でトレンチを設定した。この耕作地は道路面より一段高く、比高差はおおよそ70cmである。道路面、耕作地面において土器が採集されている。

#### 【STR遺構SK1 (第10図, 図版2)】

Ⅲ層上面で、土坑(SK1)を検出した。このSK1はトレンチ西壁よりで検出されたため遺構の全体形は不明である。検出面で長軸87cm、短軸45cm+αを測る。掘方は二段掘で検出面からの深さは65cmほどである。

SK1は、Ⅲ層上面からⅣ層の紫コラ、Ⅴ層まで掘り込んでいることから、874年3月25日以降の遺構であると判断できる。土坑埋土からは成川式土器の小片が2点確認できたが、実測はできなかった。

#### 【STR出土遺物 (第11図, 図版3)】

5TR内からは計79点の遺物が出土した。Ⅱ層から16点、Ⅲ層から52点出土している。そのうち、実測可能な2点を掲載した。13は成川式土器壺の口縁部である。口唇部は断面コの字状で外面は幅1mmほどの細かいミガキで調整される。14は成川式土器甕の口縁部である。口唇部は断面コの字状で、外面はナデ調整が施される。

#### 第6項 周辺表探遺物 (第12図, 図版3・4)

宮之前遺跡内では多くの遺物を採集している。

第1表 宮之前遺跡出土土器観察表

番号	TR	層位	器種	寸法	部位	色調	胎相	調整	備考
1	2	II層	高杯	胴部径：(4.6cm)	脚部	内：2.5YR6/8橙，外：2.5YR6/8橙 断面：10YR8/4浅黄橙，丹：10R4/8赤	石英，角閃石	内：ナデ，外：ナデ	
2	2	III層	甕		口縁部	内：2.5Y7/3浅黄，外：2.5Y7/3浅黄 断面：10YR6/1褐灰	石英，角閃石	内：摩滅，外：ミガキ	
3	2	III層	甕		口縁部	内：7.5YR7/6橙，外：10YR7/6明黄褐 断面：7.5YR7/6橙	石英，角閃石， 白色粒	内：ナデ，外：タタキ	
4	2	III層	壺	底径：(4.4cm)	底部	内：10YR5/3にぶい黄橙，外2.5YR5/6 明赤褐，断面：10YR4/2灰黄褐	石英，角閃石， 白色粒	内：ミガキ 外：ナデ，ユビオサエ	
5	2	III層	甕		脚部	内：2.5Y7/3浅黄，外：10YR5/3にぶい 黄橙，断面：2.5YR5/4にぶい赤褐	石英，赤褐粒	内：ナデ， 外：ハケのちナデ	
6	2	III層	高杯		脚部	内：10YR6/4にぶい黄橙，外：5YR7/8 橙，断面：10YR6/4にぶい黄橙，丹： 2.5YR4/6赤褐	石英，角閃石， 黒色粒	内：ナデ，外：ナデ	口唇部肥厚
7	3	III層	壺	突帯幅：5.8cm， 竹管径：0.9cm	脚部突帯	内：7.5YR7/6橙，外：2.5Y6/3にぶい黄 断面：10YR6/2灰黄褐	石英，角閃石， 白色粒	内：摩滅，外：ヨコナデ	
8	4	I層	碗	底径：(6.6cm)， 高台高：0.3cm	底部	内：5GY8/1灰白，外：7.5GY明緑灰7/1			磁器 高台に砂付着
9	4	I層	碗		口縁部	内：5YR7/6橙，外：7.5YR7/4にぶい橙 断面：7.5YR8/4浅黄橙	角閃石，赤色粒	内：ミガキ，外：ミガキ	
10	4	II層	鉢		口縁部	内：10R6/4にぶい赤橙，外：10YR7/2 にぶい黄橙，断面：10R6/6赤橙	石英，角閃石	内：ナデ，外：ナデ	
11	4	II層	甕	突帯幅：3.0cm	脚部突帯	内：2.5YR5/6明赤褐，外：7.5YR7/6橙 断面：7.5YR8/3浅黄橙	石英，角閃石	内：ナデ，外：ヨコナデ	
12	4	III層	甕		口縁部	内：2.5Y7/4浅黄，外：2.5Y5/3黄褐， 断面：10YR5/1褐灰	石英，赤褐粒	内：ミガキ，外：ミガキ	
13	5	II層	甕		口縁部	内：10YR6/4にぶい黄橙，外：5YR5/8 明赤褐，断面：10YR5/1褐灰	石英，角閃石	内：ナデ，外：ミガキ	
14	5	II層	甕		口縁部	内：10YR6/3にぶい黄橙，外： 2.5YR6/8橙，断面：7.5YR7/2明褐灰	石英，角閃石	内：ナデ，外：ナデ	
15		表探	壺		底部	内：10YR7/6橙，外：10YR7/4にぶい 黄橙，断面：10YR6/1褐灰	石英，角閃石	内：ケズリ・ナデ， 外：ミガキ	
16		表探	壺		底部	内：10YR7/6明黄褐，外：10YR8/4浅 黄橙，10YR6/1褐灰	赤褐色粒	内：工具ナデ，外：ナデ	
17		表探	甕		脚部	内：5YR6/8橙，外：2.5YR6/8橙，断 面：10R6/4にぶい赤橙	石英	内：ナデ，外：ナデ	
18		表探	甕		脚部	内：5B6/1青灰，外：10B6G/1青灰，断 面：7.5R5/1赤灰	白色粒	内：車輪文，外：摩滅	須恵器
19		表探	甕		脚部	内：2.5Y5/1黄灰，外：2.5Y4/2暗灰 黄，断面：5Y5/1灰	白色粒	内：同心円文，外：格子目 タタキ	須恵器
20		表探	甕		底部付近	内：10Y7/1灰白，外：7.5Y3/2オリーブ 黒，断面：7.5YR7/2明褐灰	白色粒，褐色粒	内：同心円文，外：格子目 タタキ	須恵器

15は丸底を呈する壺の底部である。外面は工具による粗いミガキ，内面はヘラケズリの痕跡がみられる。16は平底壺の底部である。内外面ともナデ調整で仕上げられる。17は甕の脚部片である。脚接合部は復元径で6.0cmを測る。接合部にはユビオサエが残る。18・19は須恵器の破片である。18は青灰色を呈し，内面には同心円の中心に十文字が刻まれる車輪文当て具の痕跡がみられる。外面は摩滅のため工具痕跡はみられない。19は灰色を呈し，内面は同心円文当て具，外面は格子文タタキで成形される。20は須恵器壺の底部付近の破片である。内面は同心円文当て具，外面は格子目タタキで仕上げられる。

#### 第4節 調査のまとめ

本調査では，5箇所のトレンチを設け，遺構・遺物包含層の有無と地表面からの深さを確認した。

結果，1TR以外の4箇所のトレンチにおいて古墳時代後期に位置づけられる遺物包含層を確認した。また，4TRでは古墳時代以降の溝(SD1)，5TRでは紫コラ堆積以降の土坑(SK1)を確認している。そのため，遊覽路建設に伴って遺構・遺物包含層に影響を与える可能性が高く，今後南薩地域振興局と耕地林務課と協議を行った上で，本調査を実施することが望ましいと考えられる。

## 第2章 南摺ヶ浜遺跡

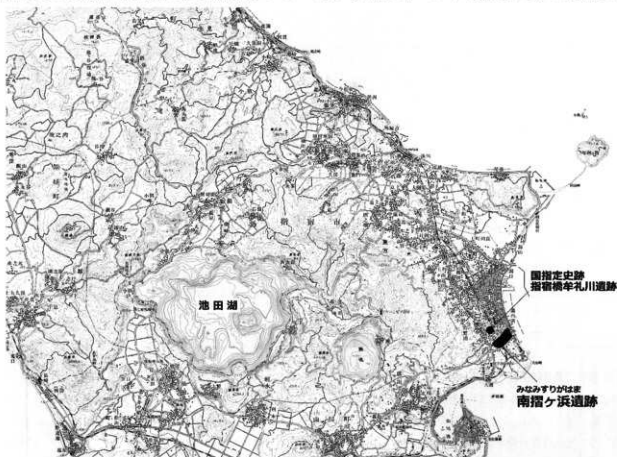
### 第1節 遺跡の位置と環境, 調査履歴

南摺ヶ浜遺跡は、指宿市の市街地海浜部に面した海岸段丘上に立地しており、山裾から海岸へ傾斜する火山性扇状地形の端部に位置する。国指定史跡指宿橋半礼川遺跡からおよそ500m離れており、集落部と墓域との関連を窺い知る上で重要な情報もたらされている。

遺跡の発見は昭和38年8月にホテル秀水園の土地造成に伴う工事中に成川式土器、須恵器、石器が出土し、昭和38年9月に南日本新聞に報じられたことを契機としている。その後、昭和44年9月にホテル秀水園に隣接する店舗用地造成時に成川式土器が出土しており、付近一帯は南摺ヶ浜遺跡として周知されてきた。

本遺跡ではこれまで指宿市教育委員会、鹿児島県立埋蔵文化財センターによって確認調査および本調査が実施されている。平成4年にホテル秀水園の拡張工事に伴うパイル打ち込み工事中に成川式土器が出土したことから工事を一時中止し、指宿市教育委員会によって緊急確認調査が実施された。この調査では土墳墓が計3基確認され、周辺一帯に古墳時代の墓域が広がることが予想された。また、平成5年にはホテル秀水園社員寮建設計画が立ち上がり、指宿市教育委員会によって事前の確認調査が行われた。遺構は検出されなかったが、宇宿上層式土器、上加世田式土器、入佐式土器、黒川式土器などの縄文時代後期～晩期に位置づけられる土器が出土している。以上の調査成果を踏まえ、本遺跡は縄文時代後期～晩期と古墳時代の土墳墓群であることが明らかとなっていた。

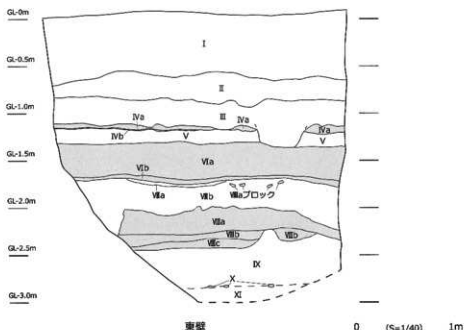
平成16年には鹿児島県土木部都市計画課が街路事業跡山丈六線改良工事を計画したことから、指宿市教育委員会によって事前の確認調査が実施された。この調査においても古墳時代の遺物包含層が確認されたことから、記録保存のための発掘調査が鹿児島県立埋蔵文化財センターによって平成17年・19年に実施された。この調査では、



第13図 南摺ヶ浜遺跡の位置 (S=1/50,000)



第 14 図 南播ヶ浜遺跡トレンチ配置図 (S=1/1,500)



- I層：表土層 SYR黒褐色3/1  
 II層：暗灰黄層 締まり無し 粘性無し 2.5YR暗灰黄5/2  
 III層：黄褐色層 締まり有り 粘性無し 2.5YR黄褐3/1  
 IVa層：関東岳を起源とする火山噴出物の2次堆積層 SYR暗褐色7/1  
 IVb層：関東岳を起源とする火山噴出物（火山灰） N暗灰3/0  
 V層：灰白層 砂礫（川砂）層 N灰白7/0  
 VIa層：関東岳を起源とする西暦874年3月25日の火山噴出物（2次堆積層） 2.5YR赤灰6/1  
 VIb層：関東岳を起源とする西暦874年3月25日の火山噴出物（火山灰）  
 VIIa層：特色層 粘灰砂り 10YR赤4/6  
 VIIb層：にぶい黄層 締まり強い 粘性あり VIIaの風化した 2.5Yにぶい黄6/4  
 VIIc層：関東岳を起源とする7世紀第4四半期の火山噴出物（2次堆積層） 5B黄灰6/1  
 VIII層：関東岳を起源とする7世紀第4四半期の火山噴出物（火山灰） 5B明黄灰7/1  
 IX層：関東岳を起源とする7世紀第4四半期の火山噴出物（火山灰）  
 X層：関東岳を起源とする弥生時代中期の火山噴出物（火山灰） 2.5YR赤灰6/1  
 XI層：灰白色層 砂礫混じり 7.5YR灰褐4/2

第 15 図 南沼ヶ浜遺跡トレンチ断面図

縄文時代晩期の包含層、弥生時代終末～古墳時代にかけての墓域が確認された（久保田ほか 2009）。調査区内では、櫻棺墓 1 基、壺棺墓 16 基、円形周溝墓 12 基、土壇墓 72 基、立石（板石）25 基が検出され、これらの遺構に供献されるかたちで多くの土器が出土している。南薩地域における古墳時代の土壇墓、立石土壇墓は指宿市成川遺跡、枕崎市松之尾遺跡、南九州市島浜遺跡などが知られており、当地における古墳時代墓制を考える上で重要である。

## 第 2 節 試掘調査に至る経緯

南沼ヶ浜遺跡の西側において集合住宅建設計画が立案された。過去の調査履歴から、土壇墓の範囲が西側にも広がる可能性があること、周囲で土器片が採集できたことを踏まえて、試掘調査の実施が必要であった。そこで、開発原因者に対して文化財保護法 93 条第 1 項による届出書提出を依頼するとともに、設計内容が判明した段階で基礎部分の試掘調査に着手することを申し合わせた。試掘調査期間は平成 28 年 12 月 20 日の 1 日間である。

## 第 3 節 調査結果

今回の試掘調査では、遺物包含層を確認することはできなかった。しかし、開聞岳の火山性噴出物堆積層（下層から弥生時代中期の「暗紫コラ」、7 世紀第 4 四半期の「青コラ」、貞観 16 年（874 年）の「紫コラ」）を確認することができたため、以下記述する。

X 層の「暗紫コラ」は、橋牟礼川遺跡や敷原遺跡などで確認されるものと同様、主に発泡の悪いスコリアが厚く



堆積している。堆積状況が良い地点においては、スコリアの上部に1～2cmの固結した細粒火山灰を確認することができる。

V層の「青コラ」は、下層からスコリア（VII c層）、火山灰（VII b層）、二次堆積層（VII a層）の層序を確認することができた。トレンチ内ではスコリアの層厚は均一ではなく、層として認識できない範囲もあった。二次堆積層では、ラミナ構造を確認できることから、細粒の火山灰が流水などによって堆積したものと考えられる。

VI層の「紫コラ」は、下層より火山礫（VI b層）、火山灰（VI a層）が堆積している。

特記すべき点として、VI a層の上位に10～15cmの砂層が堆積しており、推測の域を出ないがトレンチ南側を東流する第一山王川の旧河川からの氾濫堆積物と考えられる。この砂層は、平成16年に街路事業湯山丈六線改良工事に先立つ指宿市教育委員会が実施した試掘調査においても確認されている。

砂層中には「紫コラ」のブロック等は混在せず、また、紫コラ上面も水流などによって削平されていないことから、少なくとも「紫コラ」の降灰・固結後に比較的広い範囲に砂層を堆積させるような河川の氾濫が起きていたことが考えられる。

また、砂層（V層）の上位には、火山礫（IV b層）と火山灰（IV a層）のユニットが確認できた。IV a層は、貞観16年3月25日に噴火した「紫コラ（VI a層）」より白色を呈していることが特徴で、藤野・小林（1997）や川辺・坂口（2005）が指摘している。開聞岳が仁和元年（885年）に噴火した際に最初に降下した火山灰に比定することが可能と考えられる。

仁和元年の火山灰は、成川遺跡など旧山川町や旧開聞町でその堆積を確認できるが、藤野・小林（1997）が図示しているとおり、貞観16年の「紫コラ」より降灰量が少なく、南摺ヶ浜遺跡や橋半礼川遺跡が所在する範囲ではその層厚は薄い。

これまで仁和元年の「紫コラ」の堆積の確認が困難な地域における希少な事例であり、開聞岳の噴火による樺太地の文化変容を探る上でも重要であるため、今後、この周辺での追認が望まれる。

#### 【参考文献】

- 川辺禎久・阪口圭一 2005 『開聞岳地域の地質』地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）産総研地質調査総合センター
- 久保田昭二・辻明啓 2009 『南摺ヶ浜遺跡』鹿児島県立歴史文化財センター発掘調査報告書（144）
- 藤野直樹・小林哲夫 1997 『開聞岳火山の噴火史』『火山』第42号 195-211頁

## 第3章 松尾城跡

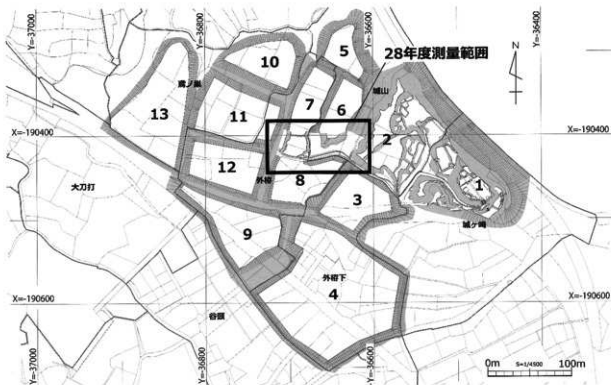
### 第1節 松尾城跡の踏査

平成28年度に実施した松尾城跡の測量は、下記のとおりである。

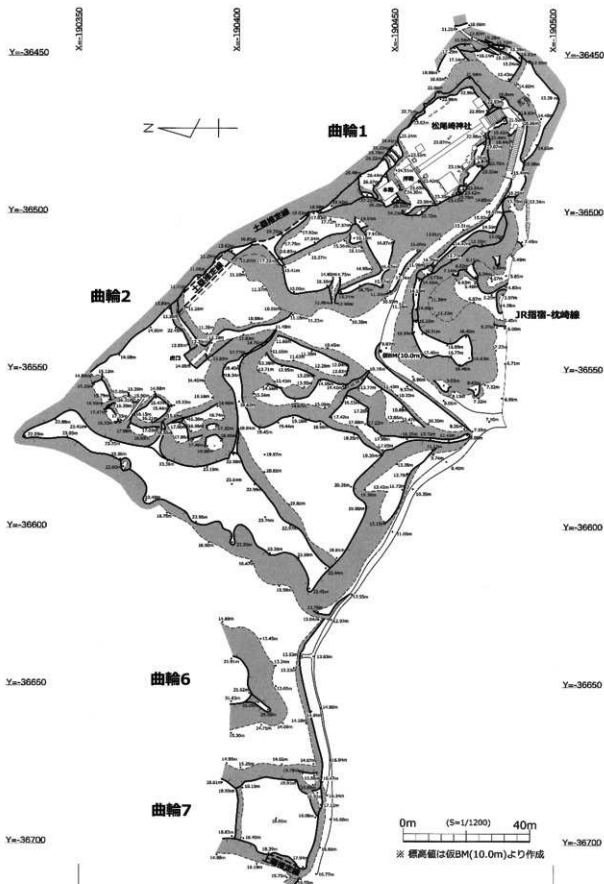
- ・実施日：平成29年1月16日(月)～1月17日(火)
  - ・指導者：三木靖氏(鹿児島国際大学短期大学部名誉教授)
  - ・対象地：曲輪6・曲輪7
  - ・測量社：御埋蔵文化財サポートシステム
  - ・踏査目的：平成23年度から継続的に実施している松尾城跡の縄張り図を作成するための基礎となる地形図作成は、曲輪1と曲輪2の主要な部分は終了した。しかし、松尾崎神社が鎮座する曲輪1の南側にある海側へ下りる道と、東側に確認されている帯曲輪状の遺構については、まだ測量は実施していない。
- 平成28年9月の台風襲来時の強風で、松尾城内に植林されている杉が倒木し、また、竹も横倒しになり、地形図の測量環境が著しく悪化したため、当初計画していた曲輪6の東側の地形測量を断念した。そして、比較的倒木が少ない範囲に変更した。
- 平成28年度は、松尾城の本丸と推定されている曲輪2の西側に位置する曲輪6と曲輪7を踏査し、縄張り図を作成する基礎となる地形図を作成した。地形測量は、曲輪6と曲輪7のそれぞれの南端で実施した(第14図)。測量結果の概要は、下記のとおりである。

#### 【曲輪6(面積：約3,486㎡)】

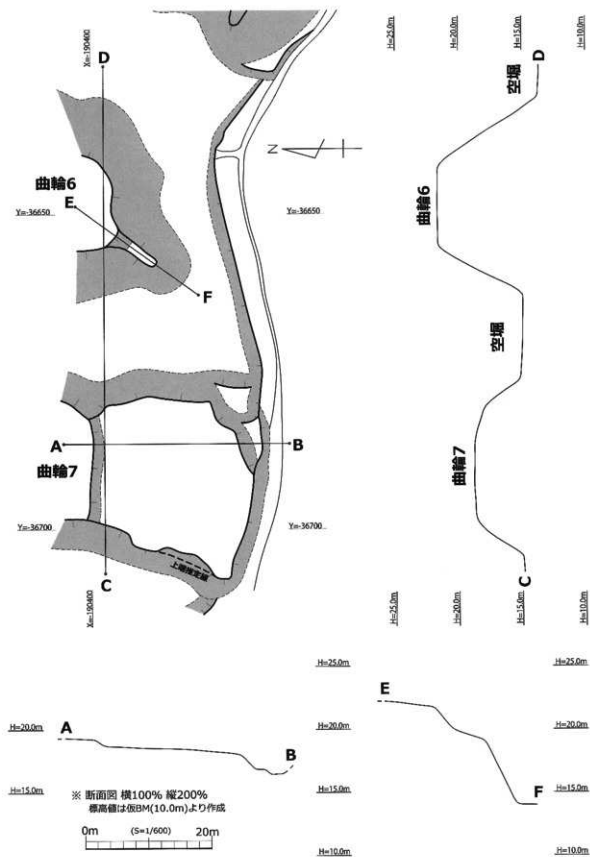
曲輪6は、曲輪2の西側に隣接する曲輪である。曲輪の長軸方向は、曲輪2の西側法面の長軸と平行する北東-南西である。曲輪6の短軸の断面形状は、台形状を呈しており、その上端はほぼ平坦である。曲輪6と曲輪2の間に位置する空堀からの高低差は、約7.5mを測る。また、曲輪6と曲輪7との間に位置する空堀からの高低差は約



第16図 松尾城跡縄張り図



第17図 曲輪1・2・6・7測量図



第 18 図 曲輪 6・7 測量図および断面図



第 19 図 曲輪 6・7 近景写真 (南から)

6.5 mを測る。

曲輪 6 の南端には、幅 1 m、長さ 4 m を測る隅檜と考えられる突出部が確認できる。隅檜の上面はほぼ平坦で、段を有している。隅檜の両端は、侵食によって本来の幅より細くなっているものと考えられる。

曲輪 6 の西側法面で観察される地層から、推測の域を出ないが、シラスを意図的に削り出し、または自然地形を一部利用しながら作り出されたものと推測できる。

今年度の測量範囲外であるが、踏査によって、曲輪 6 の西側法面には、一段から二段の帯曲輪が確認できた。また、曲輪 6 と曲輪 7 との間の空堀は、北側に行くに従い浅くなっており、その高低差は約 1 m を測るのみとなっている。

#### 【曲輪 7 (面積：約 3,734 m<sup>2</sup>)】

曲輪 7 は、曲輪 6 の西側に隣接する曲輪である。曲輪の長軸方向は、曲輪 7 とほぼ一致する北東-南西である。曲輪 7 の南端には、二段の平坦面があり、その内、より南側のものは、曲輪 8 に残されている平坦面とほぼ同じ高さであり、本来は連続する面と推測することができる。

曲輪 7 の南端は、曲輪 6 のものより長く、曲輪 8 に林道を挟んでほぼ接している。当該地の地権者による聞き取り調査によると、林道は松尾崎神社本殿建設時に、地権者の好意により土地の中央部を横断する形で新設されたものである。元来、空堀があったのか、また、古来より人道があったか否かは不明である。曲輪 8 の測量や、曲輪 7 と曲輪 8 との間での確認調査等によって、曲輪 7 は曲輪 8 が別々の曲輪なのか、または曲輪 7 と曲輪 8 は元々ひとつの曲輪であり平面形状が「レ」状を呈していたかの判断ができるものと考えられ、今後の課題として挙げておく。

## 第4章 その他市内遺跡

指宿市内にはおよそ120ヶ所の周知の遺跡がある。平成29年1月末現在で1件の92条届出, 24件の93条届出, 11件の94条届出がなされた。そのうち1件の93条届出, 1件の94条届出について確認調査を, 23件の93条届出, 4件の94条届出について工事立会を実施した。

遺跡の照会については, 平成28年度1月末現在で75件の照会・問い合わせがあった。



第20図 確認調査・工事立会地点

第2表 平成28年度確認調査・工事立会対応一覧

番号	遺跡名	所在地	種別	公共	対応	番号	遺跡名	所在地	種別	公共	対応
1	道下	西方字中林	住宅		工事立会	19	道下	西方字今村西	住宅		工事立会
2	佐賀原	西方	住宅		工事立会	20	大園原	西方字船迫	住宅		工事立会
3	追田	東方字開田ノ下	住宅		工事立会	21	玉利	東方	住宅		工事立会
4	追田	十町	太陽光		工事立会	22	橋本乳川	十二町字高田原	住宅		工事立会
5	追田	十町	住宅		工事立会	23	新善所後	十二町	住宅		工事立会
6	大園原	西方	住宅		工事立会	24	大園原	西方字大園原東	住宅		工事立会
7	大園原 (開墾地)	西方字山下	工場		工事立会	25	河内山蔵山勝	池田	道路	○	県本調査
8	敷賀	十町	住宅		工事立会	26	追田	十二町	道路	○	確認調査
9	敷賀 (開墾地)	大字乳	住宅		工事立会	27	大園原	西方	道路	○	
10	南追田	十町	住宅		工事立会	28	玉利	十町	道路	○	
11	牛乳瀬	十二町字六反平原	住宅		工事立会	29	宮之蔵	西方	道路	○	工事立会
12	成川	山川成川	住宅		工事立会	30	小牧	小牧	側溝	○	工事立会
13	敷賀	十二町字中原	住宅		工事立会	31	岩本	岩本	側溝	○	
14	玉利	東方字馬場ノ上	住宅		工事立会	32	小牧3A	岩本	側溝	○	工事立会
15	片野田	十二町	電柱		工事立会	33	敷賀	十二町	側溝	○	工事立会
16	玉利	十町字田畑	住宅		工事立会	34	大園原	西方	道路	○	
17	南洲ヶ浜	浜の浜	住宅		確認調査	35	尾長谷道	西方	法面改良	○	
18	南洲ヶ浜	浜の浜	住宅		工事立会	36	樹原跡	成川勝			学術調査

## 第1節 迫田遺跡

迫田遺跡は、指宿市十二町登ノ後一帯に所在する。遺跡は山裾に近い緩やかに傾斜する海拔20m前後の火山性扇状地上にあり、国指定史跡指宿橋半礼川遺跡から北西約2km、敷原遺跡中敷原地区から南西に約400mの地点に位置している。

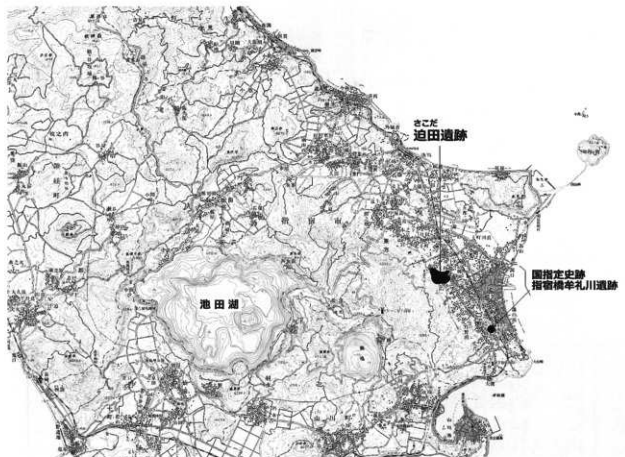
平成9年度に実施された宅地造成事業後の水道管敷設工事において、古墳時代後期の土器集中廃棄所が検出されている。土器集中廃棄所は3グループに分かれており、出土遺物は成川式土器の篋貫式段階に帰属する。出土遺物には、壺・壺の日用品のほか軽石製陽石やミニチュア土器等も含まれている。加えて、竪穴住居とみられる遺構断面2基分と、溝状遺構と考えられる遺構断面が確認されている（渡部ほか1998）。

平成27年には、指宿市建設部によって市道柳田迫田線の拡幅工事に伴う埋蔵文化財の照会があった。予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地「迫田遺跡」地内に含まれているとともに、上記のように古墳時代の集落の一部と見られる遺構が確認されていることから事前の試掘調査が実施された。調査では市道沿いに4箇所トレンチを設定し、重機等による掘削を行っている。いずれのトレンチにおいても開聞岳の火山性堆積物である紫コラ、青コラが確認されており、古墳時代の遺物包含層が確認されている（恵島ほか2016）。

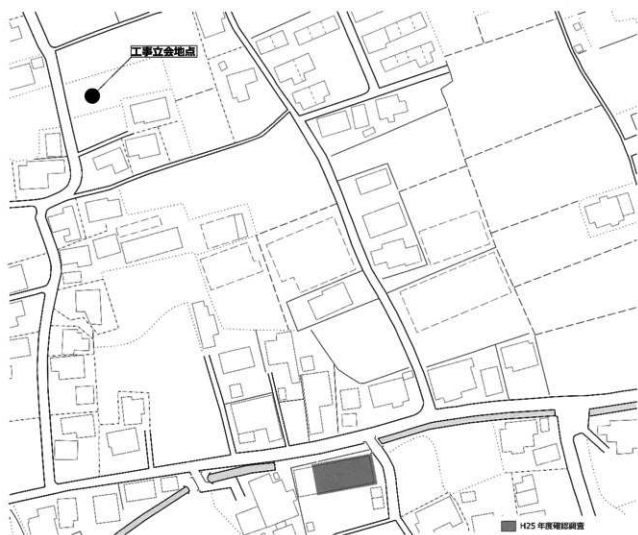
平成28年、迫田遺跡の範囲内において93条届出が提出されたため、浄化槽設置時の工事立会を実施した。

重機掘削時に常滑焼の破片が多量に出土したため、掘削を一時中断し、残存している現況ラインで土坑（SK1）の平面測量を行った。このSK1は紫コラ上層の黒色層中で検出されており、遺構埋土も黒色層に類似する。

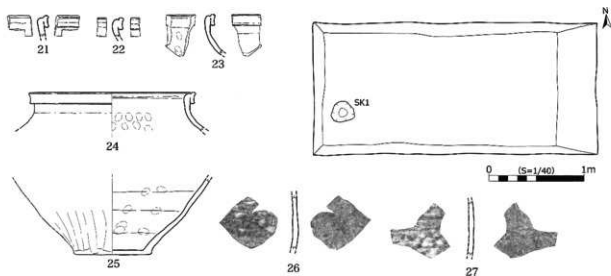
21～27は常滑焼の壺である。21～24は口縁部である。口縁部は外側に折り返された形態で、口唇部上端はゆるやかな平坦面をもつ。24は復元口径35.0cmを測る。25は平底の底部である。復元底径16.4cmを測る。外面は工具ナデ、内面は回転ナデとユビオサエの痕跡がみられる。26・27は割片片であ



第21図 迫田遺跡の位置 (S=1/50,000)

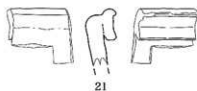


第 22 図 工事立会地点の位置 (S=1/1,500)

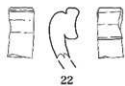


第 23 図 工事立会地点平面図

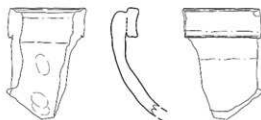




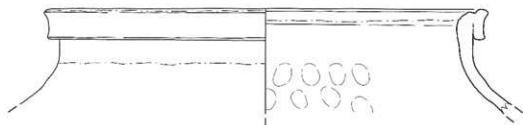
21



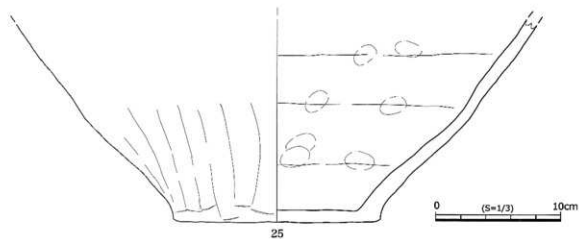
22



23



24



25

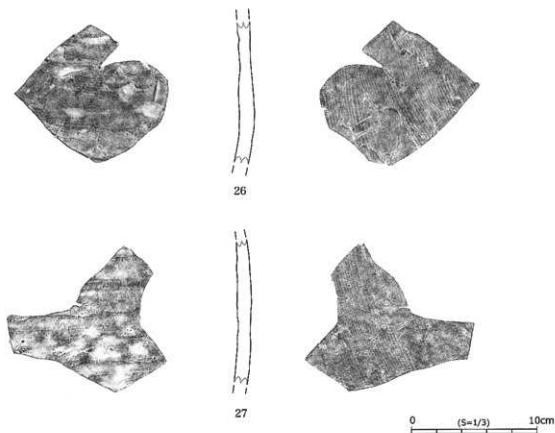
第 24 図 迫田遺跡 SK1 出土遺物 (1)

る。断面の色調や質感が常滑焼口縁部と類似しているため、同一個体である可能性もある。外面は薄い平行タタキ、内面は回転ナデのちユビオサエの痕跡がみられる。

迫田遺跡北側ではこれまで中世の遺構・遺物は確認されていない。そのため、今後は紫コラ上層でも遺物包含層が残存している可能性があるため、注意する必要があるだろう。

【参考文献】

- 恵島英子・中摩浩太郎・鎌田洋昭 2016『平成27年度市内遺跡確認調査報告書(数領遺跡・新番所後遺跡・泊田遺跡・松尾城跡IV)』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(58)  
 波部徹也・鎌田洋昭・下山寛・中摩浩太郎 1998『橋牟礼川遺跡XIII』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(26)



第25図 泊田遺跡SK1出土遺物(2)

第3表 泊田遺跡出土土器観察表

番号	TR	層位	部種	寸法	部位	色調	器和柄	調整	備考
21			甕		口縁部	内:10YR4/3にぶい黄褐, 外:2.5Y6/3にぶい黄, 断面:7.5Y7/2灰白, 軸:5GY7/1明オリーブ灰	白色粒	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	常滑
22			甕		口縁部	内:10YR4/3にぶい黄褐, 外:5YR4/4にぶい赤褐, 断面:5Y7/2灰白, 軸:7.5Y6/2灰オリーブ	白色粒	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	常滑
23			甕		口縁部	内:2.5Y6/1黄灰, 外:2.5YR4/3にぶい赤褐, 断面:5Y7/2灰白, 軸:10Y6/2オリーブ灰	白色粒	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	常滑
24			甕	口径:(35.2cm)	口縁部	内:2.5Y5/2暗灰黄, 外:2.5YR4/3にぶい赤褐, 断面:7.5Y8/2灰白, 軸:5GY7/1明オリーブ灰	白色粒	内:ロクロナデ, ユビオサエ, 外:ロクロナデ	常滑
25			甕	底径:(16.4cm)	底部	内:10Y7/1灰白, 外:10YR6/4にぶい黄褐, 断面:5Y7/2灰白	白色粒	内:ロクロナデ, ユビオサエ, 外:工具ナデ	常滑
26			甕		胴部	内:N7/0灰白, 外:N7/0灰白, 断面:2.5GY明オリーブ灰7/1	白色粒, 網	内:ロクロナデ, ユビオサエ, 外:平行タタキ	常滑?
27			甕		胴部	内:7.5Y7/2灰白, 外:2.5YRにぶい赤褐, 断面:10YR7/2にぶい黄橙	白色粒	内:ロクロナデ, ユビオサエ, 外:平行タタキ	常滑?



宮之前遺跡 1TR 東壁



宮之前遺跡 2TR III層遺物出土状況



宮之前遺跡 2TR 西壁



宮之前遺跡 2TR 北壁紫コラブロック



宮之前遺跡 3TR 南壁



宮之前遺跡 4TR SD1 検出状況



4TR SD1 遺物出土状況



宮之前遺跡 4TR SD1 完掘

図版 1 宮之前遺跡 1TR~4TR



宮之前遺跡 4TR 南壁



宮之前遺跡 5TR II層遺物出土状況



宮之前遺跡 5TR SK1 検出状況



宮之前遺跡 5TR SK1 完掘



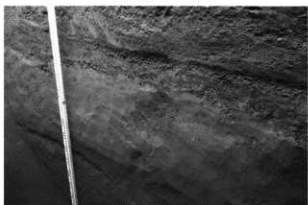
宮之前遺跡 5TR 西壁



宮之前遺跡 5TR 北壁

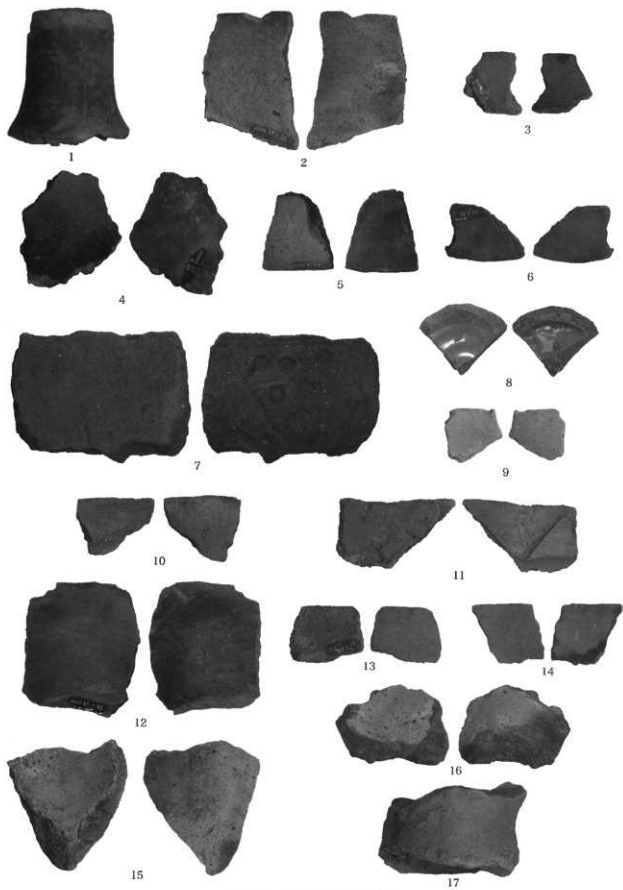


南摺ヶ浜遺跡 東壁

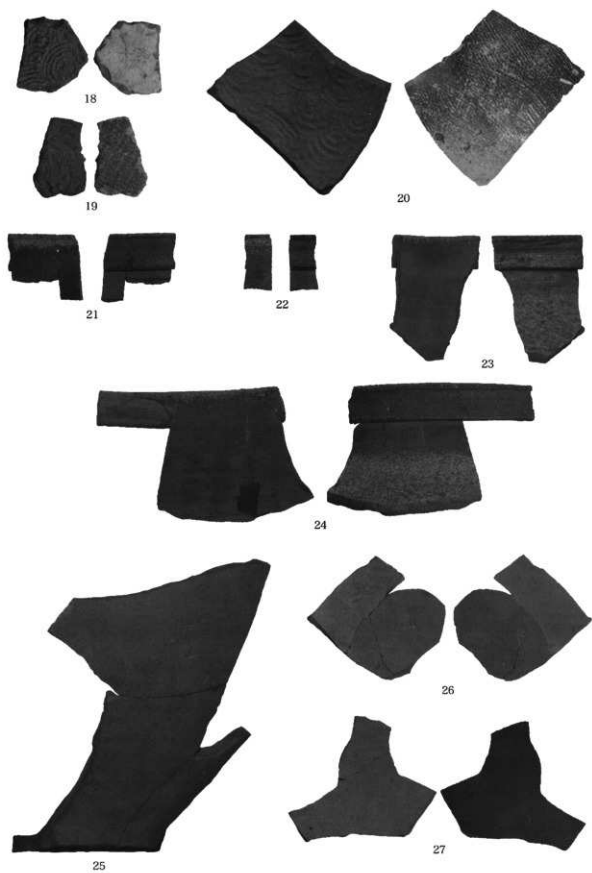


南摺ヶ浜遺跡 東壁

図版 2 宮之前遺跡 4・5TR, 南摺ヶ浜遺跡



图版 3 出土遗物写真(1)



图版 4 出土遗物写真 (2)

## 報告書抄録

ふりがな	しないいせきかくにんちようさほうこくしょ (みやのまえいせき・みなみすりがは まいせき・まつおじょうあとV・そのたしないいせき)
書名	平成28年度市内遺跡確認調査報告書(宮之前遺跡・南摺ヶ浜遺跡・松尾城跡V・そ 他市内遺跡)
副書名	-
巻次	-
シリーズ名	指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第59集
編著者名	松崎大嗣 鎌田洋昭 中摩浩太郎 西牟田英子
編集機関	鹿児島県指宿市教育委員会(指宿市考古博物館 時遊館 COCCO はしむれ)
所在地	〒891-0403 鹿児島県指宿市十二町2290 TEL:0993-23-5100
発行年月日	平成29年3月31日

所収遺跡名	所在地	コ		北緯東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
宮之前遺跡	指宿市西方 宮之前	46210	6-21-0 (2-58)	31°16'27" 130°36'42"	H28.8.18~ 20	12㎡	公共事業
南摺ヶ浜遺跡	指宿市十二町 子黒ヶ岡		6-62-0 (2-62)	31°13'38" 130°39'08"	H28.12.19	4㎡	民間開発
松尾城跡V	指宿市西方字 城ヶ崎		6-25-0	31°16'54" 130°37'54"	H29.1.16~ 17	7,220㎡	保存目的
迫田遺跡	指宿市十二町 迫田他		6-37-0 (547)	31°13'13" 130°38'42"	H28.11.1	3㎡	民間開発

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮之前遺跡	集落	古墳時代後期 ~平安時代	溝, 土坑	笹貫式土器 須恵器	
南摺ヶ浜遺跡	散布地・墓地	弥生時代後期 ~古墳時代			
松尾城跡V	山城	中世	曲輪, 空堀, 腰曲輪, 土塁		
迫田遺跡	散布地	中世		常滑焼	

---

指宿市歴史文化財発掘調査報告書第 59 集

平成 28 年度市内遺跡発掘調査報告書

宮 之 前 遺 跡  
南 摺 ヶ 浜 遺 跡  
松 尾 城 跡 V

平成 29 年 3 月発行

編集・発行 指宿市教育委員会  
鹿児島県指宿市十二町 2290

印刷 濱島印刷株式会社  
鹿児島県鹿児島市上之園町 17-2

---